第431号 昭和56年5月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年3月31日 第三種郵便物認可

1981年（昭和56年）
5月号（No. 431）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

1980年UIAA総会報告
（海外連絡委員会）……（1）
スキーの科学と思い出—西堀栄三郎
（科学研究委員会）……（2）
第12回山岳図書を語る夕べ
—イタリアの山の本—
（図書委員会）……（3）
自然保護……（4）
ゆがめられた自然保護運動
（一原有徳）
図書紹介……（5）
「わが登高行」完成す（田口二郎）
「未知なる頂へ」「アンナプルナI 8091m」「中国の高峰」
東西南北……（6）
明大エベレスト登山隊からの便り
三水会だより，五月の句
事務局より……（6）
会員番号8848番をもらって……（8）
お知らせ……（9）
報告……（10）
会務報告・ルーム日誌・会員移動…（10）
カット／芳野満彦・松本慎太郎・宮下啓三

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

一九八〇年UIAA総会報告

海外連絡委員会

会場は、ジュネーブ郊外プレニーにあるジョン・ノックス国際センター。

10月8日、各種委員会（日本は海外登山委員会に所属）の報告と検討　9日、常任理事会（日本は一昨年より傍聴させてもらう）10日は総会。なおこれに先だって、ベルナー・オーバーラントのDiabrelets で催されたヒマラヤン・シンポジウム（10月3・4日）についても併せてお伝えしたい。

A　UIAA海外登山委員会

(i)　安上り遠征隊の可否

小型で安上りのヒマラヤ山行の可能性が、何度も討議された。小人数の隊でも、登山料は安くならないから、割高につく（特にネパールでは）、持込み物資に対してもネパール政府は税金をかけすぎる（これもパキスタンや中国は簡便）。登山料を含めて、相手国政府（ネパール、パキスタン、中国）に、UIAAとして交渉すべきだとの意見が西欧勢から出た。

山を持つ国々は、それが外貨獲得の重要な手段であり、それをこちらの事情で安くしろでは話はうまく進まない。相手国の事情もよく調べ、その立場になって判断し交渉すべきだと私は提案する。

ユーゴのクナーベル（エベレストの西稜直登隊長）は、ユーゴもネパールのマナンに「トレーニング・センター」を建設したが、その維持・経営をネパール側に任せきれず、今後どうするか苦労している。やはりGive and Take でなければならないと賛成する。ポーランドのパッコウスキー（冬期エベレスト隊員）も賛成する。

(ii)　海外登山と自然保護

これについては「総論賛成、各論まちまち」で終った。山を持つ国々（ネパール、インド、パキスタン、中国、アンデスの周辺国等）は、より多くの登山者（トレッキングを含めて）を欲するが、その数が多くなればなるほど、自然破壊は進み、汚染はひどくなる。この矛盾に何ら有効な対策を見出せないのが現状。両者の共存が可能か否かで、翌日・翌々日と大論争が起った。

B　UIAA常任理事会

（傍聴記）

(i)　各種委員会

このうち、種々議論のあったものについてだけ紹介する。

(a)　安全委員会

ザイルやハーネス等の用具の検定ラベル料、検査方法およびその普及努力に見合う効果について、各国からつっ込んだ質問がある。業者とUIAAの考え方が一致しないうえ、各国それぞれの事情を内部にかかえているためで、UIAAマーク（ラベル）による収入はまだ期待できそうでない。（日本から送ったザイルのテストデータにつき、委員長に深謝された）

(b)　自然保護委員会

各国が、地域の特殊事情（極論すればエゴ）をもとに、主張をくり返し、また欠席した委員長に代り同国（チェコ）のウルフが報告を代読し、議長（UIAAボス会長）が、質問を短くして議事進行をはかったのが裏目に出て、事態が一層紛糾した。

①　トレッキングや遠征隊による山の自然の破壊の防止。

②　山の清掃に努力しよう。

③　あらゆる機械、器物による山の破壊を防止しよう。

との報告内容のうち、③に「ヘリコプター使用による」の一項があったため米のパトナムが、常任理事会の十分な検討をも待たず、また昨年と同じことを、明日の総会に報告することは絶対反対だと言ったからだ。

欧州勢（議長も含め）は、種々の妥協案を出し、採択に応じるよう提案した（採択になれば欧州側は多数というヨミもあったと思う）。

これに対し、少数派のパトナムたちは、

①　ヘリの使用でそんなに神経質な欧州勢が、今年開通したアルプス縦貫のゴッタルト・ハイウエイに、なぜ徹底的に反対しなかっ

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

留守番電話（電話番号234—六六五九）

たのか？　これこそ自然破壊の最たるものではないか。事の本質に対する認識があまい。

②　問題を先にのばす提案は、全然意味がない。有形無実の委員会に対し、常任委員会がこの場で活を入れもっと積極的な実行機関にするようでなければだめだ。

③　時間がないから、早く採択したいとは言わせない。昨年ピンカムノッチの総会で、自分が座を外した10分間の中で、ヘリの件の採択をするような離れ業をやってのけたんだから、今日この場で強化決議案を採択できないわけはないと迫った。

この状況では、誰が自然保護委員長になっても、各国に満足を与えるような案など、とうていできるわけはない。

何とか採択にこぎつけようと努力した議長も、この長い論争を、議事録に明記することでけりをつける。

カット／芳野満彦

(c)　海外登山委員会

この委員会では次の事項が承認された。

①　UIAA海外委員会は、ネパール政府に、ロヤリティ、人夫賃、保険料等の遠征費用に関して交渉する。

②　ヒマラヤの自然保護について、さらに研究を進めて完全を期する。

③　遠征隊により、地域社会の経済に悪影響を与えないよう配慮する。

これらについてはもっと諸情報を流すように、と各国から強い要請があった。クレヴル委員長は、日本が委員会に参加すればその要請にかなり応じうるので、現在交渉中と返答。

(d)　他の諸委員会の報告

今後UIAAの活動に対するPRはどの委員会がやるか？　ネパールのマナンにユーゴが建設した「トレーニング・センター」の運営はどの委員会に所属するか？の二問題を次期常任理事会までに研究することで了承し、他は特記することなし。

次期'81年春の常任理事会は、英国（マンチェスター北方、アンブレシッド湖畔）で4月4日に、総会はスイスのルガノで、10月8、9、10の3日間開催を総会にはかることと決め議事を終えた。

C　UIAA総会

常任理事会より15カ国多い、29

スキーの科学と思い出

西堀栄三郎

（昭和56年3月17日（火）夜　ルームにおける西堀会長を囲む座談会報告　科学研究委員会）

私が雪の魅力に惹かれスキーを始めたのは中学三年の時で、スキーはレルヒ少佐のものをまねて作っていた高田市山善で求め、シールの代りに手拭をまきつけて、関温泉に出かけた。当時は勿論一本杖リリーエンフェルト式の、ズダルスキー術であった。その後コールフィールドの "How to Ski" が出、二本杖となった。原理は低速回転に適する舵作用で、テレマークやシュテムに励み、今西錦司君にも教えた。

当時滑走面には縦溝が入っていなくて直滑降も不安定だったので、大工さんに四角い縦溝を入れてもらった所、やっと安定した思い出がある。二本杖は自分で作り、リングも藤を輪にして作った。その際石付だけは金具屋に頼んだが、後には節のある竹を自分で旋盤でとがらせて作った。美津濃でスキー道具展があり、今西君や、後に「最新スキー術」（三省堂）を書いた高橋健治君等と一緒に見に出かけた。その時未完成シールと称するアザラシの皮が飾られていた。早速これを買って来てスキーに付けようとしたが、ワックスを手でのばして貼りつける技法が判らず、結局電報でヨーロッパに問い合わせて解決した。当時は幅のせまいシールしかなかった。

私はイタヤ材を用いスキー板もいろんなものを作ってみた。先端の曲りの大きいものや、板の反りの大きいもの、長さの異なるもの等々である。スキーの長さはキックターン一つを考えても股下の長さが基準になる。立って手を伸ばした長さが適当というのは欧米人の場合で、日本人には背丈位が最適であろう。このような短スキーを使用するとよく回転もでき、急にスキーが上手になったように感じた。その頃からアーノルド・ランやシュナイダーの高速回転の技術が流行って来た。これらは横すべりが回転のきっかけになることを、フィロソフィカルマガジンの物理論文で知ったが、技術をマスターするには至らなかった。

私達は勿論ゲレンデよりも山に登る道具としてのスキーに徹していた。上記「短スキー」で山まわりキックターンを始めたのも私達であった。これだとキックターン毎に一歩はかせげるので、明大の故馬場忠三郎君などと神奈山に同行した時にも大いに引離した記憶がある。妙高や神奈山にスキー登頂したのは私達が最初であった。

カット／芳野　満彦

一体日本の山の雪は湿っていて重く、またブッシュも多い。このため上から見て中央がくびれているスキー板を作ったが、これは大いに偉力を発揮した。この他スキーの締具やスキー靴、アイゼン、リュック等も皆自作して研究した。ただし変形しないよう鉄板を靴の底に入れたスキー靴は木靴のようで使用に耐えなかっ

カ国（32クラブ）が集まって開かれた。議題は、

① 前回の総会議事録。
② 会長の年次報告。
③ '79年度の財務報告。
④ 会計監査報告。
⑤ 以上諸報告の承認。
⑥ 会長以下の事務局の職務執行の合法性報告（承認）
⑦ '81年度予算（収入・支出）

現在の財政状態では、組織らしい活動は不可能で、早晩会費の値上げを考えねばならなくなるが、その時期、値上げ幅は事務当局と常任理事会で研究する。

⑧ 各種委員会の報告

(a) 安全委員会（UIAAのラベル問題、ザイルその他の用具テスト等）

(b) 山小屋委員会（UIAAのメンバーが国境をこえて相互使用できるよう努力する）

(c) 青年委員会（チリおよびイスラエルより、登山技術指導者の派遣の要望あり。早急に関係国〈恐らくチリにはスペイン、イスラエルには英国〉の派遣を考えることを決定）

(d) スキー登山委員会

(e) 海外登山委員会（常任理事会での報告通り。極東地域代表として、日本を委員に推せんしたい旨、委員長から提案。一応の条件を出して日本は受諾する）

(f) 組織委員会

以上6委員会の報告は、満場異議なく承認された。ついで、

(g) 自然保護委員会

副会長のドムケ（西独）は、自然保護なくして、UIAAの存在価値なしと強調。そして、常任理事会では本報告の採択が延期されたが、何とか再考慮し採択してほしいと要望。ポーランドからは、もっと広い場でアピールしなければ効果なし、米のパトナムは、内容の良否を問題にしてはいない、実行の伴わない点に文句があると強調。ネパールのクマール・カドが、ネパールでの自然保護は昨年より一歩も進んでいないと発言。英国のグレーは、山の自然保護は世界的規模の運動に盛り上げねば効果はないと発言。何度も出された動議は過半数を得られず、次期総会まで見送りと決定。

(h) 高所医学委員会（未活動につき報告なし）

⑨ UIAAの活動報告

異議なく承認（諸国への技術援助の件等）

⑩ フィリピンの加入

異議なく承認。

⑪ 常任理事国の選出（'81～'84年まで）

議長は、常任理事会案の16カ国をそのまま総会で認めてほしいと提案。これに対し、カナダのウェイリーは、欧州偏重だ（英国を含めて米、日、三カ国しか欧州以外から選出されていない）、南米やアジアをもっと含めて再考慮すべきであると発言。米のパトナムはUIAAが世界的機構として残るか、欧州大陸のクラブになるかの選択は、4年後必らず直面する事態だと発言。常任理事会の一員として私はこの案を認めたが、登山にコロニアリズムを持ちこむような選択、10年1日のような発想は、まことに残念であると発言する。このあと、修正動議が各種出されたが、結局、事務局案として常任理事会から提案された16カ国と、立候補を希望している、カナダとブルガリアを加えた18カ国の中から、16カ国連記で選ぶことになる。選挙の結果、投票者数28のうち、白票の一国を除き、有効投票総数27で、

27票 ドイツ、フランス、英国、イタリア、スイス、ソ連
26票 オーストリア、スペイン、米国、日本、ポーランド
25票 チェコ、ユーゴ
21票 ギリシヤ
18票 ベルギー、オランダ

以上16カ国が常任理事国

15票（カナダ）、8票（ブルガリア）となった。

〈日本の海外登山の実績が高く評価され、米国、英国、フランス、および苦しくとも会費の値上げに応じてくれたことを買った本部側の強い後押しの結果、選出されたと思う〉

⑫ 会長選挙

ボスー会長の再選（'81～'84年）

⑬ 事務局員の選出（再任）

⑭ 会計監査の指名（本部推せん通り）

⑮ 名誉会員の推せん（提案通りギド・トネリを承認）

⑯ 次期総会は、スイスのルガノに決定。'82年には、シャモニとカトマンズが立候補。'83か'84にソ連がクリミヤのヤルタでと提案。ハンガリーは何年でもいいからと

た。一方滑走面に塗ったセルベット被膜は効を奏した。

当時北大や一高、東大の中に上手な人がいたが、関西ではレルヒ直伝の小林達也氏や二中校長の中山再次郎氏が私どもの先輩で、短スキーは角倉太郎君とともに伊吹、氷ノ山などで研究し、スキー道具の面では関東より進んでいた。また私達は山で訓練した結果、何時でも雪の山中に雪洞を掘ってビバークでき、吹雪でも休まず行動できた。

スキーとは直接関係ないが、雪のことに一言ふれておきたい。南極のように零下三十度にも冷え乾燥して来ると、雪は全く固らず砂と同じで、スキーは全く滑らない。このような雪は粘着力も0で、積雪に対する脅威は少ないが、日本の雪のように湿ったものになると物凄い凝集力が働く。これが雪崩の脅威にもつながっていると考えられる。雪の破壊力が増大するのは積雪がつながって凝集力が働いて強く引っぱる場合で、これらについて当委員会で今後検討して頂きたい。ヒマラヤや南極では昇華も盛んに行われ、これがセラックスやヒマラヤ襞の原因になっているのではないかと考えている。

参加者（順不同敬称略）折井健一、高遠宏、小山内正夫、遠藤孝夫、渡辺正臣、松家晋、梅野淑子、伊藤博夫、高橋詢、斎藤桂、小林碧、渡辺兵力、河野幾雄、野口末延、松丸秀夫、七里直、広羽清、野田憲一郎、原謙一、沢井政信、神谷光昭、大森弘一郎、中村純二　他9名

（文責・中村純二）

科学研究委員会報告

立候補宣言。

以上⑫から⑯までは、手続きこそ正式にとっていたが、実質は審議もない形式的なものであった。

以上は3日間にわたったUIAAの諸会議の模様である。今後4年間、日本は常任理事国としてのつとめを果すことになる。

（丹部節雄）

図書委員会主催

第十二回山岳図書を語る夕べ
――イタリアの山の本――

講師　牧野文子
フォスコ・マライーニ

三月六日(金)、イタリア語で書かれた多くの山岳書を翻訳されている牧野文子さんを講師に招き、恒例の山岳図書を語る夕べが山岳会ルームで開かれた。御主人の四子吉画伯にも同席して頂けた。はじめに山崎安治氏の牧野さんの紹介があった。牧野さんは、自分自身が話すより、牧野さんの友人でありイタリアの登山家、文化人類学者、そして日本山岳会員でもあるマライーニ氏に話しをして貰った方が、より興味深いものになるだろうというご自身の判断によりわざわざイタリアからマライーニ氏の原稿を取寄せておられた。その原稿の日本語翻訳文はレポート用紙にびっしりと書かれ、枚数は約二十枚にも達していた。牧野さんは約四十分間ぶっ続けに、その流麗な訳文を朗読された。牧野さんは長い間病床に伏せておられたと聞いていたが、すっかり全快された様子で、その若々しい声に出席者全員魅了されてしまった。今後益々のご活躍をお祈りしたい。

お話しの全容は山岳に掲載されるが、その概略を次に書いて頂いた。

（田村俊介）

・　・　・　・　・

イタリアの著名な詩人ダンテやペトラルカが山に登ったことがあればこそ、その詩句や文章が山登りを如実に形容しているといった例から話しはじめ、十六世紀にはすでにアッペンニーノ山系最高峰のグラン・サッソ登頂記録が、フランチェスコ・デマルキによって書かれていることなど、イタリア人自身でなければ思い起こせないことなどに話をすすめた。そして

三啓下宮/ヴァレ州のアルプ

自然保護

ゆがめられた自然保護運動
（日高中央横断道路反対の矛盾点）

一原有徳

自然保護とは一体なんであろうか、と昨今、日高中央横断道路計画の反対運動が報道されるたびに思わせられる。かつて大雪縦貫道路のときは延々とつづく原生林伐採の林道が、ようやくユートムラウシの湿原と銀杏ヶ原の高地自然におよぶに至って声があがり、阻止された。なのに、ここは一体何を守ろうとするのであろうか。「日高山脈は日本に残された唯一の原生林」との大前提に、山脈の写真展をし、著名な学者が自然の大切な憲章論ともいうべき論文を発表し、大々的な連合会が発足し、東京でも集会をする。本会もそれに名をとどめ、会報四二二号に渡辺正臣氏もその状況を述べられている通りである。この規模の発言の前には異議をはさむ余地なきがごとき態勢である。

しかしながらこの態勢とは裏腹に、中味はあまりにも杜撰な的をはずれた運動である。私も本会の一員としてそれを正す義務を感じ、また指摘して心ある何人かにでも、本当の大切な自然保護に目をむけ、力をかたむけてもらいたいとの一念にペンをとったしだいである。

この反対運動に参加する人に、どれだけ日高山脈と横断道路の実体を知っている人がいるであろうか疑がわしい。例をとれば、連合会の道路計画の説明は、大体本誌発表の渡辺氏と同じであるが、山や川の誤りが随所にある。ダム起点からは静内川がメナシベツ川と変る。ナナシの沢は、メナシベツ川の上流コイボクシュシベチャリ川の支流で、原流には出られないばかりか、ヤオロマップ岳は離れた山の名である。あげあしとりではない。現地を知らぬならまだしも地図を見ないで、また見てもわからぬ人の机上論といわれても仕様がないであろう。現地を知る人も中にはいるとせば、自然保護という殺し文句に迷わされているか、さもなければ何かの陰謀に加担しているか、おどらされているとしかとれないことである。

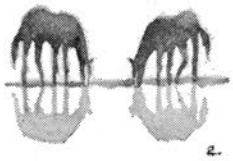
なお、誤解なきようおことわりしておきたい。私は開発の矛盾点は別問題として、自然保護を理由の対象としてである。

それでは、正しい路線はどこか、この間違いは何に拠るか知らないが、それにもかかわらず真面目に地図を見れば容易に判断がつくのは、

パンケヌシ川源流の原生林（1953・5）も
今は見られない/撮影　一原有徳

今世紀初頭に出版され各国語に翻訳された名著を残しているグィド・レイを挙げ、また数々の探検隊を率いたアブルッツィ公に随行し、その多くをフィリッポ・デ・フィリッピが書き残していることそしてデ・フィリッピの協力者でもあったジオット・ダイネッリの著述、同じく地理地質学者であったアルディト・デジオの記録、または人文科学的探検を大著としたジゥゼッペ・トゥッチらの功績をも述べた。ヴィットリオ・セッラの高い評価を得ている山岳写真にも言及し、近年の国外への探検行を記録した書名をも多数挙げた。

（以上講演要旨）



もう一つ序でに、深田久弥さんについてマライーニさんが書いてくれているものがありますので、この機会にその訳を聞いていただきたいと思います。本会へは送られてきているので、お読みになった方もあると思いますが。イタリア山岳会の「リヴィスタ・メンシーレ」の一九七二年のに、マライーニさんが「日本人とアルピニズム」という題で、日本古来の山岳宗教から始めて、近年の日本の山岳界の活躍を二十二ページにわたって書いてくれていて、その一文を故深田さんをしのぶ一節で結んでいます。で、それを……

・・・・・

〃日本の彼の愛していた山の一つの、ほんの頂上間近いところで、急に病におそわれて、つい先ごろ亡くなった友人、深田久弥の思い出で、私はこの一文を終えようと思う。深田は長年、彼のアルピニズムに関する著作を続け、それが日本の人たちに大変愛読されていた人である。彼の深い教養や観察力は人々に尊敬され、彼のユーモアは人に親しまれた。ネパールや中央アジアへ出掛けては、新しい彼の著書のための覚え書きを東京へ持ち帰った。数カ月前、彼の家を訪れたときのことが私には思い出される。深田さん（日本では主人、奥さん、娘さん誰にでもサンをつけて呼ぶ）は、東京周辺の地区の、木造の小さい家に住んでいた。彼の住まいは固定した露営のような感じであったけれど、その住まいの後ろの庭に一つ別棟の建物があって、それがかなり大きく静かで、そこを彼は好ましい山岳書庫としていた。私はそこで十八世紀のモンテ・ローザの峠について書いたあの尊敬おくあたわないW・A・B・クーリッジの世にも貴重なパンフレットを探し出したのだった。深田さんがこれを持って

すでに林道が奥までつけられた、最距短離に気づくからである。日高側のメナシベツ川全域十勝側札内川はコイカクシュサツナイ川出合上まで、二十年前にはすでに林道がつけられていた。札内川はさらに七ノ沢まで、コイボクシュシベチャリ川はシュンベツ川ポンイドンナップ川へ乗越えの林道がここ十年くらいの間に延びている。トラックの通れる永久橋まである林道で、この両者をつなぐだけでトンネル位置もあきらかで、ナナシの沢には入らずヤオロマップ岳でなくて、一八二三㍍峰ということになる。

渡辺氏のいう「峻嶮な山肌を削り落し卓越した自然を大きく破壊しながら作られる大変な道路」とは、この林道がつけられる以前の話であり、あとトンネルとそれに達する僅かの部分であるが、それとて、この計画の如何に関係なく森林資源の価値があれば林道は延び伐採はすすめられるであろう。このように、林道や伐採に無関心でこの計画道路の反対がどこで原生林保護につながるのであろうか。さらに山肌の破壊であるが、路幅は拡張されるであろうが、林道は伐採が終れば放置して一層荒れるであろう。あの林道を通った者なら一〇〇〇億円もかけて国道にでもなれば強化され、自然保護に役立つくらいのことは考えられることで、原生林に次いで第二の矛盾点である。舗装にでもなれば、美しく自然とも調和すること、欧州アルプスを例にとるまでもないことである。人工即醜ととる先入観もこの問題には介在しているような気がする。

この道路計画には開発という利権の強力なエゴイズムが存在するというが、その反対運動にも自然保護を理由にしてはまことに不真面目というほかはない。その大がかりな態勢から、私はふと真面目に戦争を考えた人が国賊呼ばわりされた、むかしに似た重い不安ののしかかる思いがする。単純な矛盾に気づかずなぜこんなところに精力を空費しているのか、そうする間も刻々と、卑肉にも本当に守らねばならぬ自然は破壊されてゆくこと必定である。

私は日勝峠から楽古岳までの主稜線と、その主なる支脈上の山に立つべく、東西の主なる川を溯行した中での観察で、樹一本まで知る林野官庁ほどにはゆかないが、日高山脈の原生林は残り少ないといってよい。十勝側は戦前から、現在では殆んどの川の奥まで林道が延び、広い地域としては北部ウエンザル川流域くらいで、これも三年前のこと、あとは通過困難な小地域であるが、これも難工事をしても林道をつけようとしている。原生林保護というからには、ここに目をむけることになるが、これは林野官庁の一大行政改革と人員配置転換なき限り防げるものではない。とすれば本当に大切な森林を標本的に守るということになろう。それは学術的な、また風景美学的な対象としてあげられよう。私は昨年ゴルジュ地帯を通過してできた林道でソエマツ岳に登ることができ、その西南稜に鹿の通り道と、日高五葉松の巨樹の原生林を経験した。林道ができたのだからやがてここも伐られる運命にあると思うと残念でならない。小さな提案として、日高特有のこの樹の独特の風景美、これは天然記念物としての小地域もあるようだが、鹿道とともに、この地域も残してもらえぬものかと思う。

北海道にはまだ小地域ながら、残さねばならぬ自然はあるはずで、大がかりな無益な運動に参加せずに、真面目に足で対象をたしかめて、真に価値ある運動をしてほしいと思う。

自然保護

いるんだな！　と思ったものだ。しかしこういう垂涎ものを彼はどうやって手に入れたのであろう。たとえば、またずっと古く一八五六年に、シュラギントワイト兄弟の発行した、大きい版の色刷りのヒマラヤの景観の完全な収集をーこの珍しいものを、どうして入手したのかと思った。中央アジアのもの、チベットのもの、ネパールのものなど、何でも揃っているのであった。彼にとって必要なときには、これらすべてのものが心に浮かんでくるのであったろう。序でにこんなことも考える。この私の記事なぞも、彼が興味を持ってくれて、参考にもしてくれたものをと思うのであるが。〃

(牧野文子訳)

(出席者) 順不同　牧野四子吉　牧野文子　山崎安治　堀内章雄　伊藤博夫　泉　久恵　池戸誠二郎　油谷次康　三栖寿生　田中正代　岡沢祐吉　島田　巽　武田満子　滝川　清　松家　晋　田村俊介　織田沢美知子　石橋正美　菅野弘章　岩瀬皓祐　斎藤健治　越田和男　野口末延

事務局より

・Tシャツはサイズ S を僅か残すだけでほぼ払底しました。斬新なデザイン2種のJACのTシャツを一組二千五百円。残部もなくならないうちにお早くお申し込み下さい。

・今年度会費納入もよろしく。

「わが登高行（三田幸夫著）」完成す

田口二郎

下巻もやっと上梓をみて編集の島田巽・近藤信行の両氏は肩の荷を下ろされたと思う。島田さんのお話では、出来上るまでの四年間三田さんからひと言も本についてのご下問がなかったそうだ。これについて著者は上巻の序に、座して三年編集を眺めて云々と書かれているが、島田さんの解釈では三田さんは決して無頓着でいたわけでなく実はたいへんご関心だったのを、ぐっとこらえていられたのだと。それにしても四年の我慢は短かいことでなく一寸真似が出来まい。しかし著者の斜めの視線に目もくれず他人の本の本作りに黙りこくって四年の歳月をかける島田さんも並の人とは言えない。著者八十一才、島田さんも喜寿をこされた。ともにのびやかな大正に青春をもつ方々で、急迫した昭和初期の世代とはどこか違っている。書評はのっけから脱線したが

明大エベレスト登山隊からの便り

三月二十四日、クーンブ氷河末端五三五〇㍍にベースキャンプを設営しました。

エベレスト街道は輸送がスムースに行かず、特にフライトにした場合、不可能に近い状況です。トレッカーの激増が主なる要因でしょうが、私たちの隊荷の一部もまだ到着していない状況です。そのためラムサングからのキャラバンによる方が確実ですが、ポーター不足から一五〇個以上になりますと不可能で分散せざるを得ません。またラムサングの少しカトマンズ寄りから立派な山岳道路が JIRI まで建設中で、すでに KIRANTICHAP まで開通しています。ここまで自動車を使えば三日間短縮になります。

私たちのベースキャンプの約三〇㍍ほど下に、建国一三〇〇年記念事業としてローツェ西壁にいどむブルガリア隊（C. PRODANOV 隊長以下二〇名）がおります。西堀栄三郎会長からブルガリア登山協会へ親書が届いていたので、実に友好的で、初のヒマラヤ遠征とあって闘志満々の様子です。

一九七〇年のJACエベレスト登山、そして昨年のチョモランマ登山の後を受け、今、明治大学単独チームでエベレスト西壁に挑めることは、大変幸運であります。

見上げるロー・ラは鋭くクーンブ氷河にバットレスを落しています。ルート工作の先鋒には、チョモランマでお世話になった長谷川良典と三谷統一郎が三月二十八日から挑みます。

私たちのチームにご支援を賜わりました会員皆さまに感謝申し上げますとともに、ベストを尽し、悔いのない登山を展開する所存です。

なお総隊長として参加している交野武一JAC名誉会員（73才）が、若手隊員と共にラムサングからエベレスト街道を歩き続け、スムースにベースキャンプ入りしました。もちろん酸素レスです。これはニュースではないでしょうか。

三月二十七日

明大エベレスト登山隊々長　中島信一

三水会だより

(1)第82回現地集会（一月十七日）

比企の峠をのんびり歩く

三水会の一月行事は恒例となった比企の山をのんびり歩くことである。今年も去る一月十七、十八の両日、不動の湯につかり、二本木峠～小川町のコースで実施した。

オかっちゃんの笑顔に迎えられた不動の湯は増築されてひとまわり大きくなったが、昔ながらの家族的な待遇がうれしいところである。

十八日、宿の好意によるマイクロバスで日向部落まで送ってもらう。軽口をたたきながらのんびりと三十分も登ってゆくとそこはもう峠であった。

両神山を背景とした奥武蔵の山なみが美しい。

打出部落には車道をいくつか横切りながら小道が続いてい

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

実は島田さんが近藤さんと下巻のあとがきに、これ以上はない書評を書いていられるのであらためて書くことがむずかしい。川崎精雄さんが書かれた上巻の紹介につづけて下巻についても何か書かれねばならぬと言うので蛇足と知りつつ二、三の感想を述べさせて頂く。

まず上巻下巻を通じておびただしい数の人が登場するのにおどろかされるのだ。山の自伝だけでこれほどの人名が挙がるのだから、外国と商売をやったり軍人とつき合ったり会社の役員をやったり銀座の裏街を知ったり、広い世間を歩いて来られた著者が、全部を書けば千頁には収まらぬだろうし、本の題名も変えねばならぬかも知れぬ。通常の人が一生知り合う人は三百名くらいだと聞いたが、またそれがどの程度のつき合い相手を言うのか知らぬが、山で縁ある人々だけを述べたこの本にいったい何人出てくるのか。しかし読者は著者の交遊の広さばかりでなく、それにもまして手厚い交遊の扱いぶりに強い印象を受けるにちがいない。著者を育てまた共に育った若き日の友々が深い愛情で語られているなら、以後の生涯にふれ合ったどの人々もこれに劣らぬ友誼にあふれた暖かい筆で記帳されているのだ。思わぬ箇所に自分が記憶されているのを見出す後進はとくにその感を深くするだろう。どの文章からも人との出合をなによりも貴ぶ著者の人生観がにじみでているようである。著者の文章に不思議な人なつこさを感じとると言っても不当にはならぬと思う。

下巻に感想をしぼると、これはやはり上巻とはちがった持味の本であり、上巻が青春の本なら下巻は晩年の書と言わざるを得ないだろう。実際に執筆されたのは戦後の方が多いようだが、上巻の花である「立山剣」「涸沢」それに著者の代表的作品と思われる「松尾坂」など一連の若い日の書き物にあふれた楽天主義とロマンチシズムが、そのせいで人の少ない子ノ権現までの山道を歩き、浅見屋のおいしい手打うどんをオナカにおさめて、吾野へむかって下るころは、朝からの曇空が心なしか薄青く思えて、奥武蔵の低い山にも春の遠くないのを思わせた。

る。ところどころに道祖神があって目を楽しませてくれる。一月とは思えない暖かい日で、裏日本の豪雪が信じられないくらいである。

しめくくりが小川町名物の「忠七飯」鉱泉、のんびり歩きと味覚とで、三拍子そろった満ちたりた二日間であった。

〔参加者〕松本熊次郎、坂倉登喜子、冨田郁夫、岩堀瑞子、小林由美子、高田真哉他四名。

（高田真哉）

(2)竹寺現地集会

三水会の竹寺現地集会が、山崎金次郎さんや島田巽さんなどの古い会員の参加を得て、去る二月十四日（土）に行われた。竹寺は奥武蔵山中唯一の神仏混合のお寺で、医王山薬寿院八王寺が正式の名。すべてが竹で造られた器に盛られた精進料理。竹筒から静かに流れ出るお酒は、宮崎県のカッポ酒とは、同じ竹筒からでも別趣があった。暫く躯を悪くされていた今井雄二さんが喜美子夫人同伴で出席されたのも嬉しかった。

竹寺と縁の深い坂倉さんは、座談会を希望されたようだが、最初に立たされた原田さんのサンサ時雨がきっかけで、民謡や歌謡曲のノド自慢となった。

翌十五日は雨こそ降らぬが、濃い霧に包まれた一日だったが、そのせいで人の少ない子ノ権現までの山道を歩き、浅見屋のおいしい手打うどんをオナカにおさめて、吾野へむかって下るころは、朝からの曇空が心なしか薄青く思えて、奥武蔵の低い山にも春の遠くないのを思わせた。

〔参加者〕山崎金次郎、松本熊次郎、鶴岡元之助、原田幹市、島田巽、望月達夫、高田真哉、今井雄二、今井喜美子、坂倉登喜子、近藤波男、片岡博、宮城恭一、勝田房治、小林碧、冨田郁夫、沼倉寛二郎、高橋照、高橋晋作、山崎直人、小林由美子、小野利次、原謙一他九名

（望月達夫）

(3)昭和56年度三水会行事

◎4月15日第86回例会
〃山と私〃
講師　成瀬岩雄氏

◎4月25日～第87回越後の〃山と地酒の旅〃越の寒梅見学

◎5月20日第88回例会
〃たてしな回顧〃
講師　今井（雄）夫妻

◎6月17日（水）第89回例会
〃静かなる山〃
講師　望月達夫氏

◎7月15日（水）第90回例会
〃未題〃
講師　初見一雄氏

◎9月5日（土）第5回
〃アンコロ餅と薬湯を探る〃
定員次第締切

五月の句

小林碧郎

雪崩るるや雲垂れて岳響きあふ
いかり草岳つつむ雲ひかり充ち
水芭蕉扉口につどふ雪解の瀬
虹消えし空のひかりの岩つばめ
花辛夷風に乱るる牧びらき
花辛夷牧の奥処は柵結はず
花胡桃雪橋崩えて音もなし
人恋ひのコリーに牧の萌え遅き
夜鷹啼く闇ふるはせて遠雪崩
霧月夜群れて暈もつ水芭蕉

東西南北

ム――前者は新時代をまるごと手中に収めた青年達のものであり、後者は大島亮吉氏と同じ土壌から生れたものだろうか――は、下巻では深く沈んで底流化し容易に姿を見せなくなった。それに代って「マナスル」や「カトマンズに使して」のなかにどっしり腰を下ろしているのは厚い体験に支えられた老練である。長い年月を隔てた今日の時点で「マナスル遠征記」を読むと、あの遠征が持ち得た時代性が絵画の如く浮き出て来て、隊長の見識、観察と文章力が並々でなかったことをあらためて認識させられる。回想文のひとつに故松方さんについて、著者が葬儀のミサのひびく教会内の円天井を眺めつつ、かって静かだった涸沢の圏谷を思い浮べ、そこに松方さんが眠っているような夢をまどろむ短かい時間が語られているが、感傷を避けながらも遠い昔の音に耳をかたむけるような哀切を伝える文章である。喜寿近い晩年の筆とは信じ難い程細かく記憶たしかな自伝的回想「底倉記」は、家族の歴史の追想だけに青春小説にあるようなほのぼのとしたものを感じさせるうちに、回想の風景はいつか蒼然とした古色を帯びて、長い年月歳月の幾重もの重みのなかに黒々と沈んで行くかのように思えてくる。

ここまで書いた矢先に三田さんと同時代のもう一人の長老、麻生武治さんが一寸した所用でブラリと立ち寄られた。机上の厚手の二冊を目ざとく見つけ暫らく手にとっておられたが、少しかん高い声で「ああ、立山剣・穂高・アルバータ・マナスル――きみい、これは方々バラバラに載っていたのをひと所に集めたものだ。島田さん達いい仕事をしたものだ。これはきみい、日本の近代登山史と言ってもいいものだよ。本棚に必ず置いておくものだよ」とたちまち見事な書評。なくもがな、の私の駄文より遥かに核心をついたカラリとした寸評。早速お借りして拙文のしめくくりとさせて頂きました

茗渓堂　一九八〇年十月発行
A5版　五一六頁　定価四五〇〇円

未知なる頂へ
―ヒマラヤ17―

スビダニェ同人

川崎市の中学校の先生たちを中心に結成され、息ながい登山活動を実践しているスビダニェ同人のヒマラヤ（広義）登山記である。

本書の副題「ヒマラヤ17」の「17」とは何を意味する数字なのか。

それは、彼らが目標とした東部ヒンズー・クシュ（H・K）のビンドゥ・ゴル・ゾムⅡ（六二一六メートル）初登時の実質的登山活動期間が、わずかに十七日間しかなかったことを意味する。これは、本書の標題や扉を見ても判らない。序文中に出てくる。標題はできるだけわかり易いものにしたい。そうしたややひとりよがり的なところが、この本のつくり方全体にある。

具体的に言えば、この本をぱらぱらめくっても、どこに何が書いてあるのか見当がつきにくいということがある。目次がすぐ現われればいいのだが、序文のあとに数枚の写真と地図、五ページにわたる隊員紹介のあとに始めて、目次が出てくる仕掛けになっているので、少々いらいらするわけである。

構成にもやや晦渋（かいじゅう）なところがあるが、その原因は第三部の日本国内での登山活動に記述を拡散してしまったためだ。本書全体が盛り沢山にすぎ、どこに重点がおかれているのかつかみにくいという印象を読者に与えてしまう。ここは事前研究（ビンドゥ・ゴル・ゾム研究）だけにとどめたかった。

はじめに気づいた欠点をあげつらいすぎてしまったが、私はスビダニェ同人諸氏の真面目で息ながいヒマラヤ、ヒンズー・クシュへの取り組みに敬意を抱いている。彼らがヒマラヤへの活動に取り組み出したのが一九七二年。七七年八月には、中部H・Kの未登峰コー・イ・ダツラ（五五七八メートル）初登を果たし、二年後に東部H・Kの六二一六メートル峰初登を果した。本書の舞台である。そして、彼らは、そのつど行き届いた報告書を送り出している。こうした折り目の正しさがこの人々にはある。登山計画と平行して遭難対策、留守中の連絡体制もガッチリ出来上っている。私のように、本書の舞台であるチトラールへ何度も出入しながら、まともな報告書一冊出していない怠惰なバガボンドから見ると誠にみごとに組織化された活動ぶりである。願わくばいたずらに組織を肥大させず、小まわりのきく同人活動を続けて欲しいものだ。

近年、ヒマラヤ登山の報告書が盛んに刊行される。そのこと自体は参考にもなるし、喜ばしいことだが、もっとぜい肉を取り除き、入手し易い頒価にすべきではなかろうか。報告書刊行の際に一考をわずらわしたい。

スビダニェ同人（川崎市多摩区三田二―五四二―二　生田中学校内）B5版二一五頁　一九八〇年七月発行　非売品

（雁部貞夫）

アンナプルナⅠ　8091メートル
―静岡県登山隊報告書―

静岡県山岳連盟編

一九五〇年六月、世界最初の八千メートル峰アンナプルナ登頂は世界の登山史に新しいページを書き加

・会員番号八八四八番をもらって

田中淳一

日本山岳会々員番号八八四八番をいただき、また明治大学エベレスト登山隊々員としてベースキャンプに居られますことは大変幸運なことだと思います。

さて三月二十八日よりローラのルート工作がスタートし、いよいよ長く峻しい西稜完登をめざす登攀が開始されました。私も隊員として、またエベレストの高度と同じ会員番号に恥じないよう、登山隊の成功のために頑張りたいと思います。

（三月三十一日　明大エベレストBCにて）

＊　＊　＊　＊

・会員番号八八四八番について

過日、会報編集委員会の席で、給々エベレストの高度と同じ、八八四八番を持った会員のことに話が及びとに角、日本山岳会でただ一人のこの会員には何か書いてもらおうということになり、早速依頼のハガキを出したのですが、梨のつぶて、それでは西堀会長もその意向だとでも書いて再度たのんだらということで調べていました。ハントのライフ　イズ　ミーティングの言葉ではありませんが、小生と黒百合の小屋主の自宅で一緒に飲んだことのある君でした。

中島信一会員を通してまず八〇〇〇番台の一番手として田中淳一君に登場してもらいました。

すでにローツェもアンナプルナもブロードピークも八千メートル峰と同じ高度の会員番号はふさがりました。かけがえのない番号です。ある会員にとっては垂涎の番号です。大切にして下さい。

（O）

お知らせ

◉第35回ウェストン祭

信濃支部

今年は35回目のウェストン祭です。35回というと一つの節目でもありますから、何とか盛りあげたいと思います。

・**六月六日（土）**は朝七時に島々の宿に集合し、徳本峠を越えます。毎年なじみの人に混って、数十年ぶりに峠に立ち、想い出深かそうに穂高岳を眺める人を時々みます。その人の帽子に、胸に、あるいはズボンのあたりに、古いJACの会員徽章を見ることがあります。この峠から見る穂高の山々だけは同じ姿です。

・**六月七日（日）**は梓川のほとりで碑前祭です。午前十時から始まり十一時半終了予定です。晴れると青空がきれいです。雨だと緑がひきたちます。ぜひおいで下さい。

◉上高地山研の開所

山研運営委員会

今年の山研の開所は例年になく雪が多いため五月九日の開所となりました。利用料は食事代別で会員が一八〇〇円、非会員が二八〇〇円と据え置きにしました。今年もよろしくご利用下さい。

え、さらにエルツォーク隊長のその報告書はベストセラーとなり、日本でも近藤等氏によって翻訳されて、われわれはそれをむさぼり読んだものである。

あれから二十九年の歳月が流れ日本隊もその頂上に初めて立った。本書はその公式報告書である。

フランス隊の初登頂から数えて第七登の記録となったこの報告書は、遠征、検討、随想の三章にわけ要領よくまとめられている。

八木公信隊長ら十二人の静岡県ヒマラヤ登山隊は北面北東バットレス・ルートより一九七九年五月八日、田中成三隊員とシェルパのペマが登頂に成功した。県岳連を主体とした初の八千㍍峰の登頂は大きく評価したい。

むろんあのフランス隊の報告書「初の八千㍍峰」のような感動は本書にないが、やはり日本人の登った八千㍍峰の報告書として貴重なものである。注文をいえば装備や、食糧などのデータにページを取りすぎていることで、むしろ久保田保雄隊員の「アンナプルナの流れ、過去、現在と今後について」のような記事にもっとウェートを置いたらさらに読みごたえあるものになったと思う。

一九八〇年五月十八日、静岡県山岳連盟発行、百十二ページ、写真多数。非売品

（山崎安治）

中国の高峰

中国登山協会監修

中国の登山活動が、近代的スポーツとしてスタートしたのは一九五五年であった。一九七五年五月に中国登山隊は北面からチョモランマの二度目の登頂を果しているが、この書は約二十年間にわたる中国登山協会の成果の中から、そのハイライトともいうべき八峰を詳細に紹介、側面から科学調査、地域の風俗など興味深い資料も提供している。中国登山に関心を持つ人の、必読の書である。

巻頭で作家の井上靖氏（日中文化交流協会会長）が「日本隊のチョモランマ登頂の成功を機に、世界の登山家、山岳愛好家たちの関心は、今や中国の名だたる高峰に集っている」と指摘し、「こうした時、本書の上梓は甚だ時宜を得、その意義は限りなく大きい」と述べているが、これまでベールに閉ざされていた地域だけに、価値ある一冊といえる。また、注目される点は、このわずか二十年にも満たない短期間に、それも国内だけで、これほどの成果と調査を成しとげた中国登山協会、科学院の活躍である。山脈、山岳の多さはうらやましい限りだが、登山運動において、世界のトップレベルへ躍り出た中国のパワーには、目を見張らざるを得ない。井上氏につづき六〇、七五年の中国チョモランマ隊・史占春隊長（中国登山協会副会長）が「中国の登山活動」と題し、全般的な登山史をさらりとまとめている。

本文はチベット地区のチョモランマ、シシャパンマで始まる。四十五枚の迫力あるカラー写真で紹介したあと、潘超氏の「チョモランマへの道」から関係各氏の科学調査、登はんの困難さ、登頂記、伝説と地図などと続いている。シシャパンマについても「〝神秘な山〟の解明」（季子修氏）や登頂記が生々しく書かれている。新疆地区ではムスターグ・アタ、コングール、コングールチュビエ、ボゴダ峰が、それぞれ貴重な写真で紹介されている。こちらも氷河、動植物、気象条件など興味深い内容で惹きつけられる。青海地区ではアムネマチン、四川地区はミニアコンガ。積石山脈の主峰・アムネマチンは、一九六〇年五月に、北京地質学院登山隊が登頂しているが、登頂の様子は体兵氏が詳細に記している。〝謎の山〟にふさわしく、謎解きの歴史もあり興味深い項目だ。ついで横断山脈の東にあるミニアコンガ。この中で許競氏が「雪崩遭難記」をよせている

会報167号に載った、当時のマナスル登山隊三田幸夫隊長からのマナスル通信の一部

今夜は仲々暑そう。それに今これを書いている時も大分ブトに襲撃されている。田口は人夫の前払いに大童。竹節は報道の仕事。依田の写真の活躍は物凄く、キャンプに着くごとに不自由の中で現像。村木は荷物の整理、報告、記録等一番忙しい。キャラバンの連中一寸休んでも村木と辰沼はスケッチの手を休めない。両人とも二冊は終ったらしい。絵具の色が仲々よろしい。水筒のミルク入りの紅茶のおかげらしい。この調子だと両人とも多作をもって鳴る画家となろう。帰国したらヒマラヤ帰りの多作家展を開かねばなるまい。田口は往還の娘を見るとやたらにナマステ（今日は、ご機嫌よう等の意）と怒鳴る。彼女らは日本娘のごとくはじらいに身をくねらせて行く。田口は得意だが、誰かが「失礼しちゃうわ」と言っているんだろうにギャフン。とも角この炎天下に皆ヘコタレながらも、ヘラズロだけはいよいよ達者で、空腹患者はますますショウケツの徴候。まず隊長として安心している。

中国登山協会は一九八〇年十二月にスークーニャン（六二五〇㍍、四川省）も開放している。

これまで中国が山を紹介した本は「中国の登山運動」（一九六四年初版、人民体育出版社編）でほかに、「中国体育」（一九七三年、同）にも大衆登山、チョモランマ、シシャパンマが紹介されている。中国の登山活動は、一九五八年七月の中国科学院による祁連山脈・シューロー山の登頂など、このほかにもたくさんある。とくにチベット、新疆地区などでは大衆の登山活動が盛んに行われている、と聞く。本書とともに浅川謙次氏監修による「中国の地理」一九七五年（人民中国編集部編）の併読もおすすめしたい。

中国人民体育出版社・東京新聞出版局共同出版・昭和五十六年一月・B5版・定価二〇〇〇円

（田山勝）

報告

支部だより

北海道支部

北海道支部恒例のスキーバスは三月八日（日）札幌八時十分出発ニセコチセハウスに十一時十分到着、お馴染みの織笠巌さんの出迎えをうける。参加者は、大塚支部長以下、会員、家族、友人等三十名で、早速昼食後、チセヌプリへ。

新雪を蹴ってひと汗かき、チセハウスに戻ると、甘酒（北海道支部名物）が配られる。温泉に浸り銘酒二世古で乾杯、中国ミニアコンガ山（七五五六㍍）登山隊員として、十九日、札幌を出発する浅利支部委員の壮行会も併せて大賑いである。あっと言う間にバス発車時刻となり、名残りを惜しみながらチセを後にしました。

北海道ミニアコンガ日中友好登山隊激励の寄書をする/ニセコチセハウスにて（3・8）

札幌までの三時間は、楽しいコーラスがバスの中で巧みにハーモニー、三十数年振りの小学生同志、遠藤、中島両氏の奇しき再会を織り込み、スキーに、温泉に、歌に、参加者一同大喜びでした。

会員・家族参加者　遠藤慶太、渡部盛夫、中島俊明、柳田涼子、大塚武、石井忠雅、平野明、高沢光雄、浅利欣吉、新妻徹、赤石喜恵子、山本良三、亀井秀子、浅利真理子、松沢節夫、松沢健一、松沢智子、織笠巌、兼平治水、外に会員の友人を含め三十名

第七回 オリエンテーション

集会委員会

毎年恒例になった、新入会員に本会をよく理解してもらうためのオリエンテーションは今回で七回目となった。

三月二十八日（土）午後、ルームにて開催。

集会委員会の村木委員長の司会により、西堀会長の挨拶のあと、折井副会長から、本会の歩みと「クラブ」としての本質について話があった。改めて本会創設期の先輩の方々の山に対する純粋さと情熱が語られ、同時に故松方三郎会長が常々会員に話されていた言葉が引用された。即ち「日本山岳会はその名の如く、日本のアルパイン・クラブである。クラブであるからは、クラブのメンバーが各々よく知り合って親しみあい、そして場合によっては助けあいもして気持のよい空気を作っていかなければなるまい。職業団体や利益団体の集りとは大いに違うところだ」たしかに社会的環境は違うし、大長老から若い年令層まで男女、随分と年令の開きのあるにもかかわらず、誰も彼もが山を媒体として親しい関係で結びついてクラブ・ライフを愉しんでいる。

年一回の機関誌「山岳」と毎月の会報「山」を読むだけで会を利用しないのは惜しい。多くの催しにも参加して、積極的に会を利用してもらいたいものである。

この後、会員のためのサービス機関である各委員会の担当理事から、それぞれ活動状況の説明があった。

科学研究委員会（中村理事）、自然保護と海外連絡委員会（鈴木理事）、医療委員会（大森理事）、婦人懇談会（山口理事）、山研運営委員会（小原評議員）、集会委員会（村木委員長）等。

次に引続いて交歓会の席上では参会者から自己紹介と入会の動機と抱負について活発な発言があった。本会には山登りのベテランしか入会出来ないと思っていた人も多かったようであったが、山の愉しみ方は山を対象として幅広く、心の糧となるようおおらかに考えていただきたい。

今後の会の運営について大いに参考となる発言も多く、また復活の小林太刀夫会員からは、かくしゃくとして雪山を歩かれている様子が伺え、心強い感銘を受けた。

（**参加者・略敬称**）滝和美、小川益男、山崎兌、高橋詢、宮本雅江、山口英一、冨田弘平、白石栄三、三宅次郎、秋元孝子、渡部温子、鈴木仁一、市野瀬建二、田中勝子、片岡泰彦、笠間昭、勝山康雄、宮城恭一、関根幸次、内藤俊夫、堀越淑子、七里直、堀井昌子、牧潤一、森田勇造、小林由美子、神山良雄、上野寿一、八島晃、若林幸子、大越隆助、稲越利夫、小林太刀夫　（**折井健一**）

会務報告

4月理事会

4月6日、午後6時30分　本会ルーム

出席者　折井、渡辺各副会長、中村、小倉、菅沢、山口、岡沢、越田、高橋各理事、山崎、金坂、小原、村木各評議員、鴫原監事

（**委任・欠席**）　西堀、川上、高本、大塚、嵯峨野、中川

◎審議事項

▽56年度評議員推薦の件（折井提案）　了承

▽55年度事業報告（折井報告）　承認

（委員会別、支部別事業一覧表、若干の追加あり）

▽55年度決算報告（折井報告）　承認

理事会承認後、2月4日に行った監事の会計監査結果について、鴫原監事より報告があった。

（問題点―56年度中に検討してほしい問題）

(1)各種資産の有効な用途について

(2)「山研」の修理資金の積立について

(3)図書保管整理の整備

参考①55年度会員数約三千六百人

会費納入率90％

②55年度新入会者約二百名

56年度交代新理事候補者　了承

◎**報告事項**

(1)東海支部20周年記念行事の件

(2)日中文交協会よりの寄付礼状

(3)56年度総会（5月15日PM6～8私学会館）は予定通り開催

(4)各委員会報告

▽指導委員会　山スキー講習会越後支部の協力をえて成功裏に終了

▽婦人懇談会　インドより来訪の話は先方の都合で7月中旬に延期

▽図書委員会　山岳史懇談会（3・31）三田さん中心で盛会（30名）

▽科学研究委員会　小集会3・17西堀さんのスキーの話（30名）、小集会4・17　フィルム保存の話（関塚氏）

▽集会委員会　新会員ガイダンス（3・28）ニュージーランド山岳会員の来訪

▽山研委員会　5・2に開所予定宿泊料据置

▽青年懇談会　4・30　韓国山岳会会員（5人）来日予定

▽山日記委員会　3・11　57年度版編集方針をきめる委員会、57年版は〝花〟をテーマとする。

◎**その他雑件**

ウェストン祭のポスター作り中止（蒲生氏より通知）

今回の議事録は文部省提出書類に添付するため署名が必要

5月理事会日時、未定（5月25日（月）を予定）

評議員会

4月9日、午後6時30分　本会ルーム

▽**出席者**　大塚博美、望月達夫、河野幾雄、田口二郎、織内信彦、村木潤次郎、水野政博、太田敬、金坂一郎、小原晴子、高遠宏、山本朋三郎、山崎安治、西堀会長、折井、渡辺両副会長

（**委任**）木下是雄、伊達篤郎、朝比奈英三、佐藤テル

▽出席評議員から**議長に太田評議員**が選出されて、議事を進行した

▽**議案**

①昭和55年度、事業報告書　原案につき若干訂正　承認

②昭和55年度、収支決算書ならびに財産目録　承認

（借入金返済につき、あと約6年半あるが、余裕があればなるべく早く返済して身軽になった方がよいではないかとの意見あり。検討することにした）

③会費滞納による除籍者　承認

（但し総会開催までは納入方依頼の努力は続ける）

④次期役員候補者推薦については3月評議員会にて推薦の通り、再度確認

▽**報告事項**

次期評議員候補者推薦については、4月6日開催の理事会にて次の通り決定した

・（重任）望月達夫、大塚博美、村木潤次郎、木下是雄、高遠宏、河野幾雄、佐藤テル、朝比奈英三

・（新任）小原勝郎、松丸秀夫、辰沼広吉、山田二郎、柴田均二、岸田権二、片岡博、西澤健一、飯野亨、細川沙多子、蒲生明登、折井健一　以上20名　略敬称

（なお昭和56年度事業計画案ならびに収支予算案については3月開催の理事会、評議員会において、それぞれ承認済み）

ルーム日誌（56年3月）

4日（水）　婦人懇談会

5日（木）　西独ブリンクマン氏外務省招客として来室

6日（金）　山スキー準備会

9日（月）　理事会

10日（火）　山岳図書を語る夕べ

11日（水）　山日記編集委員会

13日（金）　評議員会

14日（土）　婦人のための高所登山セミナー

17日（火）　科学研究委員会講演会

18日（水）　三水会

23日（月）　図書委員会

24日（火）　小西政継氏の話し

27日（金）　自然保護委員会

28日（土）　オリエンテーション　ニュージーランド山岳会歓迎会、中国登山研究会

30日（月）　山岳史懇談会

今月の来室者445名

会員移動（3月）

退会

5619　大槻　氏巴

7908　高橋千鶴子

訂正

一月号No.428　布目　治三→布目治二へ

昭和五十六年五月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町

発行所　社団法人　日本山岳会

発行者　佐々保雄

編集代表　岡沢祐吉

電話東京（261）四四三三

振替口座東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所　株式会社　技報堂